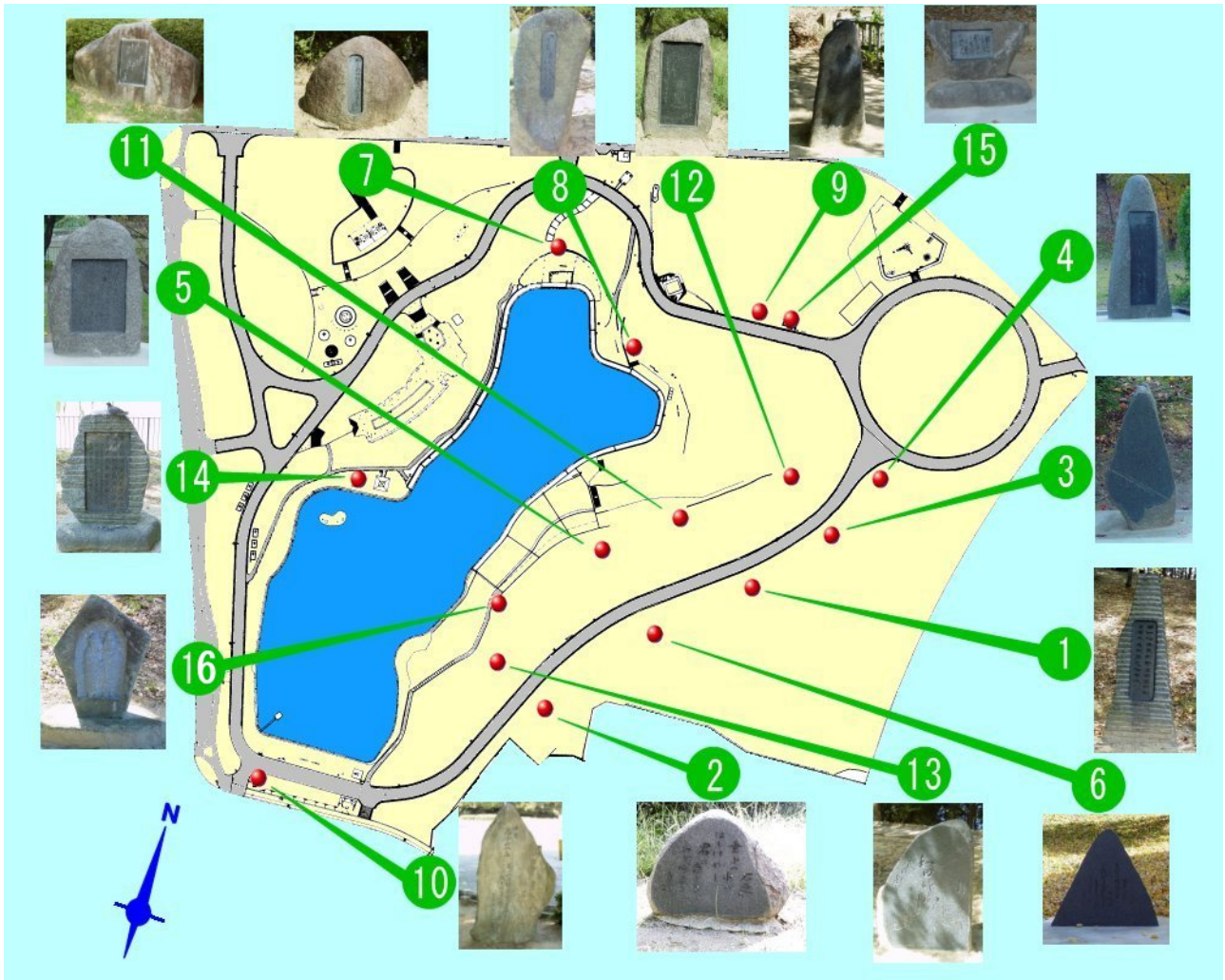
千　里　南　公　園

（千里石ぶみの丘）

吹　田　市

千里南公園歌碑位置図



①万葉歌碑	②万葉歌碑	③万葉歌碑	④弘法大師空海
⑤道元禅師	⑥後拾遺和歌集	⑦松尾芭蕉	⑧小林一茶
⑨加賀の千代女	⑩僧良盛	⑪与謝野晶子	⑫会津八一
⑬柳原白蓮	⑭楓橋夜泊	⑮吹田くわいの碑	⑯仲よしレリーフ

は　じ　め　に

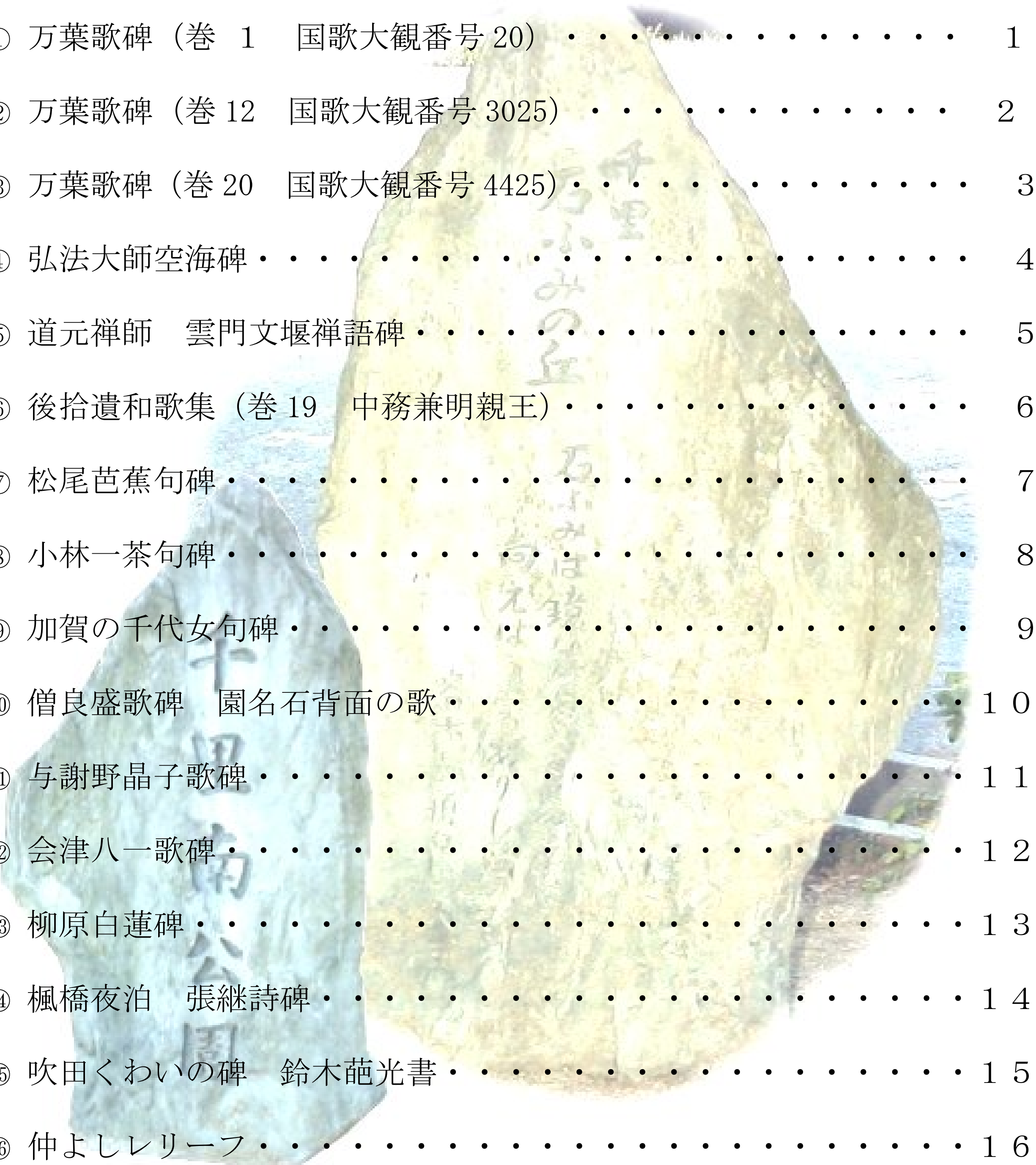
昔から吹田には高名な詩人・歌人・俳人の来遊も多く、文化活動が多彩に行われてきましたが、文学碑などの文学に触れる場は多くありませんでした。

そこで「千里石ぶみの丘を創る会」代表で吹田市在住の拓本研究家道浦摂陵さんが、昭和５７年から「千里南公園を『千里石ぶみの丘』に」との思いで、文学碑１５基とレリーフ１基を吹田市に寄贈されました。なお、吹田くわいの碑建立にあたっては、吹田くわい保存会　北村英一さんのご協力もいただきました。

本書では、この歌碑や句碑の詩・歌・句の読みと写真の紹介にとどめましたが、広く市民のみなさまに身近な千里南公園の文学碑に親しんでいただき、文学的視点からの吹田市への関心や愛着をさらに高めていただければ幸いです。

平成１８年２月吉日

目　次



① 万葉歌碑（巻　1　 国歌大観番号 20）・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

② 万葉歌碑（巻 12　国歌大観番号 3025）・・・・・・・・・・・・・・・　2

③ 万葉歌碑（巻 20　国歌大観番号 4425）・・・・・・・・・・・・・・・・　3

④ 弘法大師空海碑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

⑤ 道元禅師　雲門文堰禅語碑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5

⑥ 後拾遺和歌集（巻 19　中務兼明親王）・・・・・・・・・・・・・・・・・　6

⑦ 松尾芭蕉句碑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

⑧ 小林一茶句碑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8

⑨ 加賀の千代女句碑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9

⑩ 僧良盛歌碑　園名石背面の歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０

⑪ 与謝野晶子歌碑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１

⑫ 会津八一歌碑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２

⑬ 柳原白蓮碑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３

⑭ 楓橋夜泊　張継詩碑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４

⑮ 吹田くわいの碑　鈴木葩光書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５

⑯ 仲よしレリーフ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６

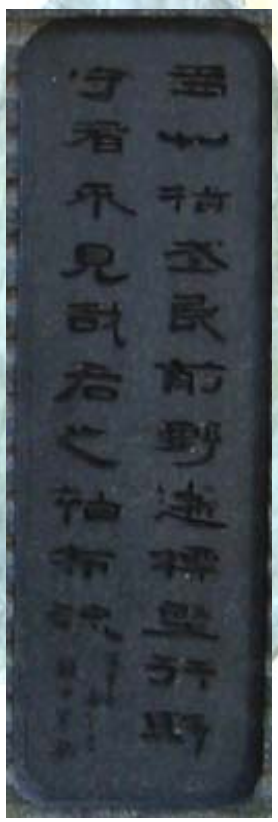
① 万葉歌碑（巻１　国歌大観番号２０）　花田峰堂先生筆

茜草指　武良前野逝　標野行
野守者不見哉　君之袖布流

原文で彫られていますが、訓みは、「茜(あかね)さす紫(むらさき)野(の)行(ゆ)き標(しめ)野(の)行き野守(のもり)は見ずや君が袖振(そでふ)る」でしょう。

「天皇蒲生野に遊猟せられた時、額田(ぬかたの)女王(おおきみ)の作られた歌」と詞書にあります。

天智天皇７年(668) ５月５日近江国蒲生野（滋賀県八日市市）に狩猟された時の作です。



折口信夫博士の『口訳萬葉集』(中公文庫所収）に

紫草の花の咲いてゐる野、即、天子の御料の野を通って、我がなつかしい君が袖を振って、私に思ふ心を示してゐられる。あの優美な御姿を、心なき野守も見てはどうだ。

と訳されています。

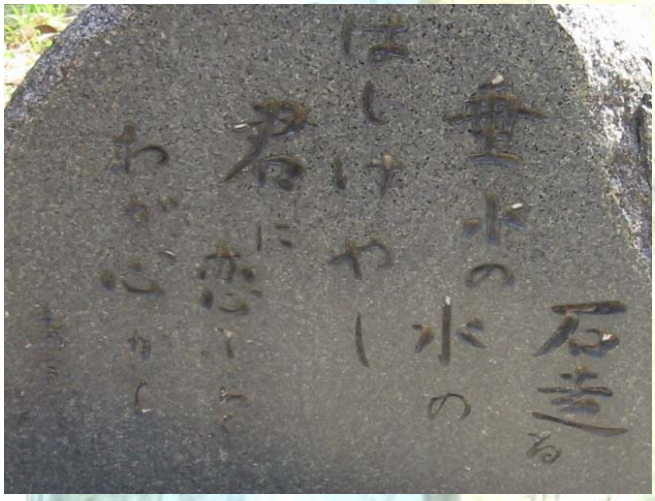
あかねさす　むらさきのいき　しめのいき　のもりはみずや　きみがそでふる　と読んだこの歌には次のような返歌があります。

むらさきの　におえるいもを　にくくあらば　ひとづまゆえに　われこいめやも

② 万葉歌碑（巻１２　国歌大観番号３０２５）

万葉集巻十二　「物に寄せて思を陳べたる歌一百五十首」の中に集録されています。歌を詠んだ人はわかりません。

石走（いわばし）る　垂水（たるみ）の水の　愛（は）しきやし
君に恋ふらく　わが情（こころ）から



いわばしる　たるみのみずの　はしけやし
　きみにこうらく　わがこころから
原文には、

石走　垂水之水能　早敷八師

君尓恋良久　　吾情柄

とあります。

岩を走り、したたる水のように、愛すべき君に恋うことは、わたしの心のゆえです。

武田祐吉博士訳

岩の上を激しく流れる、瀧の水のように、激しくいとしい方に、焦れて、焦れて居ることだ。自分の心の所為で。

折口信夫博士訳

③ 万葉歌碑（巻２０　国歌大観番号４４２５）

防人(さきもり)に　行くは誰(た)が夫(せ)と　問ふ人を
見るが羨(とも)しさ　物思(もひ)もせず

「昔年の防人の歌八首」の一首で、原文（万葉仮名）には、

佐伎毛利尓　由久波多我世登
刀布比登乎　美流我登毛之佐
毛之母比毛世受

とあります。

防人(さきもり)は、古代、唐・新羅の侵攻を防御するために筑紫・対馬・壱岐に３年交替で派遣された兵士ですが、天平２年（７３０）から東国地方の者に限るようになりました。東国の兵士とその家族が詠んだ歌が防人歌で、『万葉集』巻 13・14・20 に約１００首を収めています。ことに巻 20 には孝謙天皇の天平勝宝７年（７５５）に召された遠江国（静岡県）以東の国々の防人歌が８４首も入っています。これは、兵部少輔として難波国（大阪）にあって防人事務を担当していた大伴家持（養老元？～延暦４年）の採録によるものです。

防人にゆくのは、どこの男と問う人を見るのがうらやましい。物思いもしないで。

武田祐吉博士訳

あの防人となって行く中の、あの人は誰の旦那だろう、と見物の中にまじった人が、問うているのをば見るのが、羨しいことだ。あゝした気楽な気持ちになりたいものだ。
－わたしは、自分の夫を行かせるのに。

折口信夫博士訳

④ 弘法大師空海

阿字の子が　　阿字の古里　　立出でて
又立返る　　阿字の古里

密教では万物は不生不滅で、その真理を体得することが悟りに至る根本であるとして、「阿字より出でて阿字に帰す」と説いています。

「阿字」については『密教の世界』
（朝日カルチャーブックス４　大阪書籍昭和５７年）を参照。

空海（宝亀 5～承和 2 年 774～835）は、平安初期の僧。真言宗の開祖。讃岐の人。俗姓佐伯氏。延暦２３年（８０４）入唐。大同元年（８０６）帰朝。紀州高野山に金剛峰寺を開き、真言密教を広め、私立学校「綜芸種智院」を開設、書道でも三筆の一人として著名。

主著に２４歳の時に著わした『三教指帰』、高弟真済の編集になる漢詩文集『遍照発揮性霊集（性霊集）』があり、『日本古典文学大系』第７１巻(岩波書店昭和４０年）に収められています。

あじのこが　あじのふるさと　たちいでて

またたちかえる　あじのふるさと

作者弘法大師（空海）は、宝亀五年（７７４）讃岐国（香川県）　に生れ、二十四歳で仏門に入り、延暦二十三年（８０４）遣唐使に従って渡唐。留学すること三年、真言密教を学んで帰朝し高雄山寺に住して真言宗を開いた。

のち桓武天皇の命で教王護国寺（東寺）を経営し、また修禅入定の地として高野山に金剛峯寺を建てた。

⑤道元禅師

雲　門　文　堰　禅　語　碑

日　々　是　好　日　（日々、これ好日）
春に百花あり　　夏に緑風あり　　秋に
紅葉あり　　冬雪ありて
涼しかりけり

若し閑事の心頭にか挂ぐ無くんば　　便ち是人間の好事節　　道元

日　日　是　好　日

この語は雲門文偃が弟子たちに向って、自問自答のかたちで、自分の生き方を告白されたものであるといわれる。

筆者の道元（１２００～５３）は京都の久我家の出身。十四歳で比叡山にのぼり出家したが、天台の教学にとけこめず、建仁寺を訪ねて栄西と明全に禅を学んだ後、明全とともに宋に渡り、天童山の如浄について参禅・帰朝後越前（福井県）の永平寺に移り、生涯を弟子の養成と仏法の興隆に捧げた。この語は道元の生き方であったともいわれる。

来る日も来る日も、楽しく平和なよい日が続く。一日一日を大切に生きる心がまえを教えていう。

道元（正治２～建長５年１２００～５３）は、鎌倉初期の禅僧。曹洞宗の開祖。俗姓久我氏。貞応２年（１２２３）入宋、安貞元年（１２２７）帰国。越前に永平寺を建立し、子弟を養成。
主著『正法眼蔵』（岩波文庫全４刊）
『正法眼蔵随聞記』（岩波文庫）は高弟懐奘が師の言を記録した書。両書とも『日本古典文学大系』第８１巻に収めています。

⑥ 後拾遺和歌集（巻１９　中務兼明親王）日野舟聲　先生　筆

道 灌 ゆ か り の 古 歌 の 碑

七重八重　花は咲けども山吹の　みの一つだに　なきぞ悲しき

ななえやえ　はなはさけども　やまぶきの　みのひとつだに　なきぞかなしき

七重八重に美しく花は咲くけれども、山吹には実が一つだってならないことが悲しいことだ。

湯浅常山の軍談書『常山紀談』（岩波文庫）によりますと、江戸城を築いた室町中期の武将太田道灌（永享4~文明18年　1432~86）が鷹狩りに出て雨に降られ、野中の一軒家で蓑を借りようとしたところ、若い女が無言で山吹の一枝を折って差し出しましたが、その意味が解らず怒って帰館しました。これを聞いた側近が、この古歌（後拾遺集）の意味だろうと答えました。

そこで大いに恥じて歌学に志すようになり、後にその知識が軍略にも大いに役立ったということです。

左側面に「石匠　下坊弘」と刻まれています。

この歌には次のような伝説がある。

江戸に最初の城を築いた太田道灌（１４３２～８６）が、和漢の学に秀れ和歌をよくしたのは、若いころ狩にでて雨にあい「みの」を借りようとして立寄った貧しい農家の少女が、山吹の一枝をさしだしたがその意味を理解できなかった。側近の人にその意味（みのひとつだになきぞかなしき）を教えられて学門に志したからだといわれる。

⑦ 松尾芭蕉（正保１～元録７年）句碑　（真筆）

松　尾　芭　蕉　句　碑

ふる池や　蛙（かわず）飛込む　水のおと

ふるいけや　かえるとびこむ　みずのおと

芭蕉は正保元年（１６４４）伊賀（三重県）上野に生れ、はじめ藤堂家に仕えたが、二十八歳の時江戸に下り、深川に芭蕉庵を営んで俳諧風雅の道に精進すること十年、蕉風を確立し俳諧の革新をなしとげた。

行脚漂泊を第一義として生涯を行旅の中に終始し、大阪の「花屋」で客死するまでに「おくのほそみち」をはじめとする多くの紀行文を発表している。

貞享３年作。句集『春の日』所収。

『庵桜』に二句「飛ンだる」、『暁山集』に初句「山吹や」となっています。句の成立については各務支考著『葛の松原』（元録５年刊行）にくわしくみえます。季語は「蛙」で、春。

伊丹市の柿衛文庫にこの句の芭蕉真蹟短冊があります。

【参考】

『芭蕉俳句集』中村俊定校訂（岩波文庫　昭和４５年）

『芭蕉全発句』上・下山本健吉編（河出書房新社昭和４９年）

『蛙は、なぜ古池に飛びこんだか』　李御寧著（学生社　平成５年）

⑧ 小林一茶（宝暦１３～文政１０年）句碑　（真筆）

小　林　一　茶　句　碑

痩(や)せ蛙　まけるな一茶　是(これ)にあり

やせがえる　まけるないっさ　ここにあり

一茶は宝暦十三年（１７６３）信濃（長野県）に生れ、はやくより江戸にでて竹阿に俳諧を学んだ。父の死後異母兄弟との争い、三男一女の早死・晩年の位居焼失などにあい不遇のうちに一生を過した。

そのためか強者に対する反抗心と弱者に対する同情心が強く、野性に富み、主観的傾向の強さから奇警な目をもって眺めた作句が多く、文化・文政期の俳壇の異色的存在となった。

「おらが春」「七番日記」などを残して雪深い信濃柏原で死んだ。

文化 13 年（１８１６）の作。前書きに「武蔵の国竹の塚といふに、蛙のたたかひありける、見にまかる。4 月廿日なりける」とあります。

「やれ打つな蠅が手を摺り足を摺る」「雀の子そこのけそこのけお馬が通る」
とともに哀憐の句として著名。

【参考】

『新訂　一茶俳句集』（岩波文庫）
『一茶の俳風』前田利治著（富山房　平成 2 年）
『一茶の文学』矢羽勝幸著（おうふう　平成 7 年）
『一茶』藤沢周平著　（文春文庫　　昭和 56 年）
『小林一茶』小林計一郎著（吉川弘文館　昭和 60 年）

⑨ 加賀の千代女（元録１６～安永４年）　句碑　（真筆）

千　代　女　句　碑

あさがほに　釣瓶とられて　もらひ水
あさがおに　つるべとられて　もらいみず

千代は元禄十六年（１７０３）　の生れで、加賀（石川県）松任の人。五十一歳の時出家して素園と号した。作風は素朴で女流俳人として有名。「千代尼句集」があり、
「夕顔に女の肌のみゆる時　起きてみつ寝てみつ蚊帳の広さかな」
「蜻蛉つり今日はどこまで行ったやら」
など千代らしい作品が伝えられている。

季語は「朝顔」で、『歳時記』では秋の植物に分類されています。
一夜のうちに蔓を伸ばした朝顔が、井戸の釣瓶に絡みついて水を汲めない。蔓をほどくのがかわいそうで、隣の家に水を貰いに行くという、女性らしい心情を詠んだ句。四如軒の絵に千代自身が賛したものには、初句「朝顔や」とあります。
評判の作品に、
「起きて見つ寝て見つ蚊帳のひろさかな」
「蜻蛉つり今日はどこまで行ったやら」
があります。

千代は、江戸中期の俳人。加賀国松任町の表具屋福増屋六左衛門の女。
各務支考・仙石廬元坊の指導を受ける。
１８歳の頃結婚して一男をあげ、夫と子に死なれ実家に帰ったといわれています。
この句は、既白編『千代尼句集』所収。

⑩ 僧良盛（国上寺住職）歌碑

園 名 石 背 面 の 歌

いしぶみは　かがみならねど　ことのはに　むかえばうつる　ありしよのかげ

安政五年（１８５８）新潟県分水町の乙子神社境内に良寛の詩歌碑が建てられ、良寛の追悼会が催された。
この歌はその席上でできた寄せ書の中にあり、国上寺の住職良盛和尚の作で、この時に建てた詩歌碑の性格を語りつくしている。
吹田市千里南公園の「いしぶみの丘」の入口にふさわしい歌として選ばれ、当時の市長　榎原一夫氏が揮毫、建立されました。

⑪ 与謝野晶子（明治１１～昭和１７年）歌碑

与　謝　野　晶　子　歌　碑

やわ肌の　あつき血汐に　ふれも見で　さびしからずや　道を説く君

やわはだの　あつきちしおに　ふれもみで
　さびしからずや　みちをとくきみ

明治３３年（１９００）の作。歌意は「女性のやわらかな肌を流れ燃えたぎる血汐、その熱い情熱に触れてもみないで、寂しくはないか、道を説く君よ。」
晶子自身も「世の道学先生達よ、女の熱愛に触れることもしないあなた方の生活・感情を没却した生活はお寂しくないのでせうか」と解釈しています。

晶子は明治十一年（１８７８）堺の商家に生れ、堺高等女学校（現在の泉陽高校）を卒業。
明治三十四年鉄幹を慕って上京。同年歌集「みだれ髪」を刊行。のち鉄幹と結婚した。
女性としての人間肯定、恋愛讃美の情熱的を歌を詠んだが、しだいに浪漫的ななかにも清澄な歌を詠むようになっていった。
「源氏物語」などの古典評釈や童話なども書き、歌壇だけでなく文壇でも評価されるようになり、社会問題でも指導的発言をした。

明治三十七年、日露戦争のさなかに　「君死にたまうこと勿れ」を発表し、嗽嗽たる非難を浴びたことでも有名である。

【参考】

『与謝野晶子歌集』　（岩波文庫）
『みだれ髪』　（角川文庫）
『みだれ髪全釈』　逸見久美著（おうふう　昭和５３年）
『決定版　与謝野晶子研究』赤塚行雄著（学芸書林　平成６年）
『与謝野晶子を学ぶ人のために』上田博他編（世界思想社　平成７年）

⑫ 会津八一（明治１４～昭和３１年）歌碑

会　津　八　一　歌　碑

ひそみきて　たがつくかねぞ　さよふけて　ほとけも
ゆめに　いりたまふころ

万葉調を基調とし、浄化の息づかいと古代の憧景（しょうけい）の思いで満たされています。

八一は明治十四年（１８８１）新潟県に生れ、中学時代から短歌・俳句を作り、早稲田大学卒業後母校で教鞭をとった。

のち　「夕刊ニイガタ」を主宰し、「南京新唱」「山光集」「寒燈集」などの歌集を出している。

秋艸道人の名で世に知られるようになったのは、昭和十五年に　「鹿鳴集」を出してからである。

短歌については素人をもって自任し、時流の外の存在として自らを持し、生涯歌風を変えなかった。

万葉調で古都詠唱をし、独自の歌風を開いた。仮名書きによる流麗で浪漫的（ろうまんてき）な歌、対象への深い洞察の態度がある。書家としても一家をなした。歌集『南京新唱（なんきんしんしょう）』『鹿鳴集（ろくめいしゅう）』『寒灯集（かんとうしゅう）』随筆『渾斎随筆（こんさい）』などがある。

【参考】

『会津八一と奈良』小笠原忠著　（宝文館出版　平成元年）
『会津八一の歌』　山崎馨著　（和泉書院　平成５年）
『会津八一』　宮川寅雄著　（紀伊国屋書店　平成６年）

⑬ 柳原白蓮（明治１８～昭和４２年）歌碑

柳　原　白　蓮　歌　碑

和田津海（わだつみ）の　　沖に火もゆる　　火の国に
われあり誰ぞや　　おもわれ人は

わだつみの　おきにひもゆる　ひのくにに
われありたぞや　おもわれびとは

白蓮は明治十八年（１８８５）柳原前光の娘として生れた。北大路資武と離婚した後、九州の富豪伊藤伝右衛門に嫁し、その美貌と才気と文筆により「筑紫の女王」と謳われたが、大正１０年、社会運動家宮崎竜介と恋愛結婚をした。

竜介の活動を助けながら歌集「踏絵」やいばら「幻の華」などのほか、自伝小説「荊棘」を出している。作歌としては、「踏絵もて　ためさるる日の　来しごとも歌反故（うたほご）いだき　立てる火の前おもいきや　月も流転の　影ぞかしわがこしかたに　何をなげかむ」がよく白蓮の生涯を語っている。

⑭楓橋夜泊　　中唐・張継

張　継　詩　碑

月 落 烏 啼 霜 満 天
江 楓 漁 火 対 愁 眠
姑 蘇 城 外 寒 山 寺
夜 半 鐘 声 到 客 船

月落ち　烏(からす)啼(な)いて霜(しも)天に満つ。

江楓漁火（こうふうぎょか）愁眠に対す。

姑蘇（こそ）城外の寒山寺。

夜半の鐘声（しょうせい）客船に到る。

つきおちからすないて　しもてんにみつ
こうふうのいさりび　しゅうみんにたい
すこそじょうがいの　かんざんじ
やはんのしょうせい　きゃくせんにいたる
ちょうけい

張継はこの詩（七言絶句）によって有名。しっとりとした旅愁をうたって優れています。

「楓橋」は江蘇省蘇州の西郊、楓江に架けられた橋。

「夜泊」は夜船に泊まること。

「江楓」は川岸の楓、「江村」になっているテキストもあります。

張継は中国湖北省の人。生年はわからないが、天宝十二年（七五三）進士の試験に合格し、大暦年間（七六六～九）　になって唐の朝廷に仕へ「検校祠部郎中」の職についている。

博識で議論好きな性格を持ち、政治家としても立派な仕事をして名声を博した。

詩集一巻があり、四十七首の詩が伝わる。

碑文の揮毫者は清国末期の人、兪越である。

⑮ 吹田くわいの碑（巻１０　国歌大観番号１８３９）

鈴　木　葩（は）　光（こう）　書

君がため山田の沢に芯ぐ採むと

雪消（ゆきげ）の水に裳の裾ぬれぬ

と詠まれている「芯ぐ」は、おもだか科の植物と考えられ、吹田くわいはおもだかの根が大きくなった変種ですから、万葉の時代にも歌われていたでしょう。

『万葉集』巻十に（国歌大観番号１８３９）

加賀の千代女の句碑のすぐ右隣に「吹田の慈姑（くわい）」園があります。

思いでる鱧（はも）の骨切りすり流し

すいたくわいに天王寺蕪

これは江戸後期の幕史で、狂歌師・戯作者として有名な太田南畝（寛延２～文政６年、別号、蜀山人・四方赤人）が大坂で食べた上方料理のうまさを回想した狂歌です。

「すいたくわい」は、『摂陽群談』『摂津名所図絵』『五畿内志』　などにも紹介され、『大坂名物番付』には関脇になっています。京都の御所にも 毎年献上され、貴人に賞味されました。

学名は牧野富太郎博士（文久２～昭和３２年）の命名で、Sagittaria　triforia L-forma　Suitensis　Makino　といいます。「スイテンシス」は吹田に産するという意味です。

普通、「くわい」は奈良時代に唐から輸入されたものですが、「すいたくわい」は日本古来の植物です。

「すいたくわい」は、お正月には鴨型の藁苞（わらづと）で贈物にされていました。

【仲よしレリーフ】